



特集

建築のまちを
旅する 02

米沢

伊東忠太の故郷へ

— 代表作「上杉神社」を訪ねて



表紙の写真

〈上杉神社〉拜殿・正面階段部分

設計 | 伊東忠太

拜殿正面の階段は各段1本の角材で構成されている階(きざはし)であるが、その小口に留められている銅金物(階小口飾)には、伊東忠太自身による見事な装飾が施されている。基本的には様式を尊重しながら、金物ディテールには独自のデザインが奔放に施されている

[写真:石田 篤]

左写真

〈上杉神社〉拜殿^{げぎょ}・懸魚と破風飾り

拜殿破風には猪目(ハート形の文様)の懸魚があり、その上には蝶が羽を広げたような銅板の破風飾りのはめ込まれている。ここにも忠太独自のデザインが見てとれる

[写真:石田 篤]

LIXIL eye no.14

2017年10月20日発行

発行 | 株式会社LIXIL

編集発行人 | 森田浩一郎

マーケティング本部

セールス&マーケティング統括部

〒100-6007

東京都千代田区霞が関3-2-5

霞が関ビルディング7階

Tel: 03-6273-3635

Fax: 03-6273-3742

制作 | 株式会社フリックスタジオ

デザイン | 株式会社ラポラトリーズ

印刷 | 竹田印刷株式会社

* 本記事の無断転載を禁じます

* 本文中の敬称は省略させていただきました

次号『LIXIL eye』no.15は、

2018年2月発行予定です。

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。

<http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/>

訂正とお詫び

本誌no.13、「紙上の建築」64ページの本文末尾から3行目に誤りがありました。正しくは、下記の通りです。

誤:一筆描きが集合した62ページの

正:一筆描きが集合した63ページの

訂正の上、お詫びいたします。

CONTENTS

特集

04 建築のまちを旅する | 02

米沢

06 テーマ1

伊東忠太の故郷へ——代表作「上杉神社」を訪ねて

ナビゲーター | 倉方俊輔・志村直愛

11 上杉神社 / 上杉伯爵邸(上杉記念館)

16 テーマ2

米沢が生んだもう一人の建築家、山下寿郎とその事務所

19 米沢建築めぐり

22 住宅クロスレビュー | 02

コンクリート

室伏次郎「北嶺町の家」× 新関謙一郎「WKB」

30 戦後建築コンペを振り返る | 02

国立京都国際会館 (コンペ実施年:1963)

戦後コンペのマイルストーン

文 | 大川三雄

36 新世代・事務所訪問 | 02

生物建築舎

ナビゲーター | 門脇耕三

44 構造家の新発想 | 02

つくり方から考える

金田充弘

50 土木のランドスケープ | 02

曾木の滝分水路

ナビゲーター・文 | 八馬 智

54 Design + Technique

名古屋JRゲートタワーホテル

ホテルビスタ仙台

58 TOPICS

「SATO」を届けて、みんなを笑顔に——世界の衛生課題の改善に向けて

文 | みんなにトイレをプロジェクトチーム

61 INFORMATION

LIXILからのご案内/展覧会+イベント/LIXIL出版 新刊案内

64 紙上の建築 | 02

無限揺動美術館

田中智之

米沢

特集 建築のまちを旅する 02

日本全国、どのまちを訪れても、そこにはすぐれた建築がある。それにまつわるエピソードを知れば、旅はさらに面白い。建築をテーマにした旅の特集、第2回は米沢を取り上げる。

法隆寺が日本最古の木造建築であることを立証し、明治神宮、築地本願寺の設計で知られる我が国近代黎明期の建築家、伊東忠太の出生地がこの米沢。代表作「上杉神社」に忠太の熱意の痕跡を見つけてみよう。さらに山下設計の創始者・山下寿郎もこの地の生まれ。彼の代表作もまだまだ現役で市民に愛されている。現代組織設計事務所に受け継がれた、ひとつのスピリットを感じてみよう。

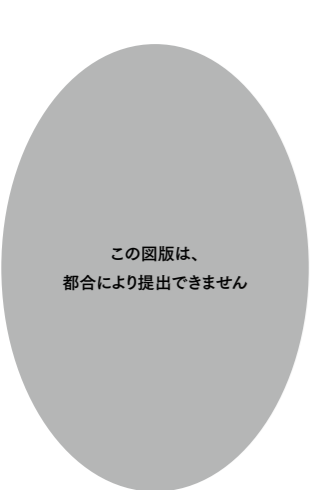
「上杉神社」は上杉謙信公を祀る神社で、関ヶ原の戦いの後、上杉氏の居城となった米沢城の城跡にある。城跡は松が峠公園として開放されていて、参道の奥、透塀に囲まれたなかに姿を見せるのが拝殿だ。その両脇には稽照殿（宝物殿）と祭器庫が、本殿に対して左右対称の位置を意識して立つ（右手に少し見えるクリーム色は稽照殿の壁）。この2つも忠太の設計で、関東大震災以前ながら鉄筋コンクリート造で建てられた【写真：石田 篤】

テーマ1

伊東忠太の故郷へ——代表作「上杉神社」を訪ねて

ナビゲーター | **倉方俊輔**（大阪市立大学大学院准教授）・**志村直愛**（東北芸術工科大学教授）

取材・文 | 長井美咲
写真 | 石田 篤（特記以外）



この図版は、都合により提出できません

伊東忠太

いとぅ・ちゅうた

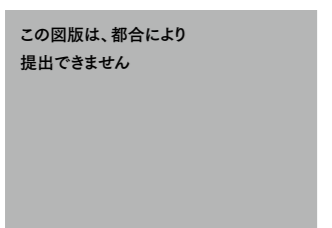
1867（慶応3）年、山形県米沢市に父・祐順、母・はなの次男として生まれる。伊東家は代々医者の家系。米沢で生活したのは6年ほどだが、晩年、米沢市より名誉市民第1号に選ばれた。略歴はp.10参照【所蔵：日本建築学会建築博物館】

01 | 興譲館

上杉綱憲が1697年に設置した学問所を、治憲（鷹山）が再興した藩校。命名は鷹山の師だった儒学者の細井平洲。語源は「大学」の「一家仁一国興仁、一家讓一国興讓」から。現在の山形県立米沢興譲館高等学校はこの藩校の流れを汲む

02 | 忠太自画伝

出生から中学校を卒業するころまでの生活を、忠太が晩年、漫画風にまとめた冊子。全49コマの挿絵は軽妙なタッチで描かれ、当時の暮らしの様子、家族や友人、身近な人々との関わりなどを解説する文章からは忠太のユーモアと鋭さが感じられる



忠太自画伝より「後藤俊庵」。家の書生について描いた1コマ【所蔵：日本建築学会建築博物館】

京都の平安神宮や東京の明治神宮、築地本願寺などを設計した建築家の伊東忠太。彼は建築史家でもあり、急速に西欧化が進む世の中であって日本建築を見直し、日本建築の通史を我が国で初めてまとめ、日本に建築史学を築いた。また、建築という概念の再構築にも努めた。たとえば「Architecture（アーキテクチャー）」は日本に伝来当初、「造家」と訳されていたが、芸術に属するものの訳語としては不適切と異議を唱え、「造家学会」を「建築学会」（現・日本建築学会）に改名させた。

日本の近代建築の黎明期に、多才な活躍を見せた忠太。そのルーツは山形県米沢市にあり、設計を手がけた「上杉神社」は「これまで携わったどの工事よりも幸福だった」という。忠太は故郷の仕事にどんな思いで向き合ったのか。忠太の研究者であり、建築史家としては忠太の後輩にあたる、大阪市立大学大学院の倉方俊輔准教授と東北芸術工科大学の志村直愛教授とともに米沢を訪ねた。

米沢市は山形県の最南端に位置する。東京から山形新幹線に乗ると最初に停車するのが米沢駅だ。地理的には盆地で、東は奥羽山脈、南は吾妻連峰、西は朝日山地といった山々に囲まれる。また、松尾芭蕉が「五月雨をあつめて早し」と詠んだ最上川の上流域でもある。

歴史的には上杉氏の城下町として知られる。戦国時代に伊達氏の領地だったこともあるが（伊達政宗は米沢で生まれ、20年余過ごした）、1598（慶長3）年、上杉謙信の跡を継いだ景勝は豊臣秀吉の命で、越後（現在の新潟）から会津（現在の福島）に転封され、このとき重臣・直江兼統を米沢城に配した。その後、関ヶ原の戦いで西軍に加勢したことにより、会津120万石から米沢30万石に減移封。景勝は米沢藩の初代藩主となり、幕末まで上杉氏が米沢を治める。

歴代藩主で最も有名なのは9代治憲だろう。出家後の号「鷹山ようざん」で呼ばれることの多い彼は、深刻な財政難により破綻寸前だった米沢藩でさまざまな改革を行い、藩中興のきっかけをつくった。名君として広く知られ、ジョン・F・ケネディが「日本で最も尊敬する政治家は上杉鷹山」と話した逸話もある。鷹山公は曾祖父の4代綱憲つなのりが創設した学問所を藩校・興譲館こうじょうかん⁰¹として再興。1871（明治4）年、伊東忠太はこの興譲館に入学している。

愛郷心が生んだ「有為会」

忠太は1867（慶応3）年、伊東家の次男として米沢に生まれた。伊東家は代々医者の家系で、父は祖父の医院を手伝っていたが、軍医を志願して上京。祖父は将来の教育を考え、1873（明治6）年に忠太兄弟を父のもとに上京させた。そのため忠太が米沢で過ごした期間はごく短い。

子どものころから絵を描くのが得意で、「忠太は紙さえあてがっておけば大人しくてよい、と両親も始終言っていた」と「忠太自画伝⁰²」に残している。その自画伝によると、あるとき父に将来の道を問われ、「美術家になりたい」と答えたら、「男児たるものが国家のために尽くすことを考えずに、美術家になろうとはふがいない。美術は末技だ」と論された。ちなみに忠太の芸術的な才能は母親譲りだったようで、「母は性来芸術に興味深く、一寸絵もかけ、草紙錦絵が大好きであった」と、これも自画伝に記している。

父が軍医を辞して米沢に戻ったため、忠太は中学卒業後、叔父で官僚（のちに政治家に転身）の平田東助⁰³の家に兄とともに寄宿し、東京外国語学校ドイツ語科に通った。同校の廃止後は第一高等中学校（旧制一高）に編入。このときに平田家から本郷の下宿屋に居を移し、兄や弟、米沢出身の学生数名と共同生活を送った。

1889（明治22）年、帝国大学工科大学造家学科に進学。工学を専攻したのは叔父東助の友人で、やはり米沢出身、東京外国語学校の最後の校長だった内村良蔵⁰⁴のアドバイスが強く影響したようだ。しかし、なかでも最も芸術的な要素のある建築を選んだのは自身の意志だろう。

忠太の発案による同郷人の親睦団体「有為会」が、共同生活仲間の学生6名を発起人に結成されたのもこの年だ（3年後、米沢有為会に改称）。忠太は建築の勉学と並行して有為会の活動にも尽力。特に会誌の発行に情熱を注ぎ、多くの論説を寄稿し、表紙デザインも手がけた。忠太の愛郷心がうかがえる。

同会は同郷人の心をとらえ、発足後わずか1年で全国の会員数が400名を超えた。その後は体制を充実させながら、学生向け寄宿舎の開設や奨学金貸与制度の運営など育英事業も始め、現在の公益社団法人米沢有為会に続いている。

忠太と故郷米沢の関わり

建築家・伊東忠太の代表作のひとつである「上杉神社」は1923（大正12）年に竣工。このとき忠太は50代半ばだった。

神社は米沢駅から車で10分ほど走った市内中心部の松が岬公園まつがきの中にある。この公園は米沢城址で、外周の濠にかつての名残をとどめる。社殿はその本丸跡に立ち、米沢藩の藩祖である上杉謙信公を祀っている。創建は1871（明治4）年だが、1919



1 伊東家墓 1911年 設計 | 伊東忠太

寺社建築の第一人者だった忠太は墓の設計も多く手がけている。最初に設計した墓は伊東家、つまり親族のものだ。伊東家の墓所は故郷米沢の「龍泉寺」の境内、本堂北側にある。墓域は凝灰岩でできた低い塀で囲まれ、四隅と正面にやはり凝灰岩でできた柱が立つ。その柱頭には擬宝珠（ぎぼし）がかたどられ、側面にも華頭状のレリーフが彫ってある。「これらもおそらく忠太のデザインでしょう。正面の2本は門柱らしく、現在はありませんが、観音開きの扉が取り付けられていた痕跡が見られます。庭園風の墓域で、なかなかモダンです」と志村教授。この中に墓碑は4つある。向かって右手で仲良く並ぶ2つの五輪塔は忠太の両親、中央は祖父母、一番左が兄夫婦だ。さらに両親の墓碑の隣には、高さ30cmほどの小さな大日如来座像が寄り添う。これは忠太ら3兄弟が亡き母の供養のために建立したものだ。志村教授は「彫りの深い肉感の豊かな座像で、アルカイック・スマイルの優しい表情が印象的です。ガンダラ仏を思わせる東洋的な趣を感じます」と語る

（大正8）年の米沢大火で本殿をはじめ大半の建物が焼け落ちた。翌年から大規模な再建工事が始まり、忠太は設計を委嘱された。

米沢大火では松が岬公園の隣、米沢城二の丸跡に立っていた「上杉伯爵邸⁰⁵」も類焼し、建築家・中條精一郎⁰⁶の設計で1925（大正14）年に再建された。中條も米沢生まれで、忠太の1歳下。やはり東京帝国大学で建築を学んでいた。伯爵邸再建の際は忠太も意見を求められたという。

米沢に残る忠太の作品は少なく、確実なのは上杉神社と伊東家の墓だけだが、志村直愛教授によると、その墓のある龍泉寺⁰⁷の本堂も忠太の設計と伝えられているという。また、「成島八幡宮⁰⁸の参道の両側、石の基壇の上にかつて立っていた一対の鉄灯籠も忠太の設計です。それと千眼寺には忠太考案の署名がある『千眼寺保呂羽堂境内計画図』が保存されています。その配置計画案が描かれたのは上杉神社が完成したのと同じ年です」と話す。米沢と同じ置賜地方の高阜町にある「亀岡文殊堂」も忠太の設計だ。1914（大正3）年の竣工で、上杉神社より9年早い。



上杉神社拝殿

03 | 平田東助

政治家（1849–1925）。米沢生まれ。忠太の父・祐順の弟。兄が家を継いだため平田家の養子となり、藩校興譲館で学んだ後、慶應義塾や大学南校（現在の東京大学）に入学。岩倉使節団に随行して訪欧、ドイツの大学で学ぶ。帰国後は官僚を経て政治家になり、農商務大臣、内務大臣、内大臣を歴任。龍泉寺の本堂に掲げられている山号は東助の揮毫。また、東京九段から移設され、現在は町田にある東助像の台座は忠太の設計

04 | 内村良蔵

教育者（1849–1910）。米沢生まれ。平田東助とともに慶應義塾や大学南校に学ぶ。文部官僚を経て、1877–1885年に東京外国語学校の校長を務めた

- 凝灰岩の小塀に囲まれた伊東家の墓域。正面と四隅に立つ柱も凝灰岩
- 花立て一体型の石造香炉。「このタイプの香炉は忠太が設計した他の墓でも見られます」と志村教授。正面に伊東家の家紋が彫ってある
- 母の墓碑の隣に置かれた大日如来座像。台座に忠太ら3兄弟の名前と、母の没年に建立したことが刻まれ、母子や兄弟の深い絆を感じさせる【写真：小松正樹】

05 | 上杉伯爵邸

最後の米沢藩主、上杉家14代茂憲（もちのり）伯爵の本宅として米沢城二の丸跡に1896年に造営されたが、1919年の米沢大火で焼失。米沢出身の建築家・中條精一郎の設計により1925年に再建された

06 | 中條精一郎

建築家（1868–1936）。米沢生まれ。福島県安積の開拓事業で知られる幕末の米沢藩士、中條政恒の長男。東京帝国大学工科大学建築学科を卒業後、文部省技師を経て、1903–1907年イギリス・ケンブリッジ大学に学ぶ。帰国後、曾禰達蔵とともに曾禰川條建築事務所を設立。代表作に慶應義塾図書館、明治屋ビル、講談社ビル、如水会館、小笠原伯爵邸など。作家の宮本百合子は娘

07 | 龍泉寺

伊東家の菩提寺。米沢は大正期に2回の大火に見舞われており、1917年の大火で本堂が焼失。その後、忠太の設計により現在の本堂が再建されたとされるが、「記録が残っていないので断定はできません」と志村教授。ただ、「向拝に唐破風が用いられていること、その向拝や入母屋造りの大屋根の破風に所々、打ち抜きの装飾金具が付いていることなど、忠太の作品と思われる節がある」という

08 | 成島八幡宮

奈良時代の777年創立と伝えられる古い神社で、現在の社殿は本殿が1654年、拜殿が1383年の造営とされる。忠太は1927年にこの神社を訪れ、社殿の木彫などに国宝に準ずべきものが多々あるのを発見し、社殿とともに保存が急務であることを力説。5年後に行われた大修繕では、忠太の提言により玄関を撤去し、柿葺きだった屋根を茅葺きに改修した。この改修に合わせて市民が鉄灯籠の奉納を発願。その設計を依頼された忠太は快諾したという。鉄灯籠は竣工式の日に寄進されたが、第二次世界大戦中の金属回収で供出され、現在立つものは1972年の再建されたもので忠太の手によるものではない

09 | 上杉神社稽照殿（宝物殿）

1922年竣工。上杉神社の本殿に対して右手奥に立つ。上杉謙信が所有した鎧の中でも逸品といわれる「色々威腹巻」や、直江兼統が所有していたといわれる「愛」の前立の甲冑といった上杉家由来の甲冑や刀剣、絵画など約300点を收藏展示



上杉伯爵邸にて。志村直愛教授（左）と、倉方俊輔准教授（右）[写真：小松正樹]

08 | 建築のまちを旅する | 米沢

狛犬に見る忠太の思想

松が岬公園は平面が正方形で、上杉神社は西側中央に位置し、東から参道がのびる。拜殿は入母屋造り、背後の本殿は流造りで、杉の透塀が境内を囲む。その北側に立つ稽照殿（宝物殿）⁰⁹と南側の祭器庫¹⁰も忠太の設計だ。

社殿の数々は端正だが、忠太の個性豊かな意匠を期待して見に行くと、やや地味に映る。しかし、「上杉神社は伝統的な神社建築の形式に則りながら、忠太の作品になっています」と志村教授。倉方俊輔准教授も「忠太は古社寺保存会の委員という国の仕事をしていたから、忠太の設計と伝わる神社でも実際は設計しておらず、役職上、監督のような立場でかかわったという場合が多い。でも、この上杉神社は細部や意匠から、明らかに忠太自身が設計しているとわかります」と話す。

たとえば、唐門の手前に鎮座する狛犬¹¹からして忠太らしさが満載だという。

倉方「顔が漫画チックで、いかにも忠太の妖怪の顔。忠太の狛犬には原図とだいぶ違うものも多いのですが、これは彫り師がかなり忠実に再現していて、忠太が制作途中にきちんとチェックしたと思われる」

志村「胸板が厚くて姿勢がずっとしていて洋犬っぽい。また、前脚の付け根に羽が生えていて西洋伝来のグリフォンを思わせる。しかも一対が向き合うのではなく、真っ直ぐに前を見据えてスフィンクスのように。忠太は世界を旅したときにその実物を見ていますからね」

倉方「軸線が見える感じですね。そもそも狛犬は守護獣。その本来の意味に立ち返って造形を施すのが近代の建築家らしい。後ろ姿がまた良くて、背中からお尻にかけて3本、パルメット紋（忍冬紋）のような建築の装飾が施されている。兼松講堂¹²でも見られるように、妖怪が途中から建築の装飾になるのは忠太の特徴。どこまでが生き物で、どこからが建築か、その境目がありません」

志村「高座間や台座には禅宗様の火灯窓の形を採り入れています」

倉方「築地本願寺¹³でも火灯窓の形を使っています。忠太が書いた曲線論には、ギリシャ・ローマと日本の曲線は確かに違うが明確な境目はない、とあります。この曲線も日本建築らしくあり、西洋古典建築の削り形らしくもあり、イスラムアーチにも見えて、東西を架け渡すよう。忠太は西洋に対しての東洋という思想を打ち出した人ではなく、西洋と東洋の違いは段階的だと主張した人。その考えによって西洋中心主義を超克しようとしました」

打ち抜きの金具も大きな特徴

唐門の扉に使われている装飾金具にも忠太らしさが表れているという。

志村「神社建築に使われる装飾金具はプレス加工が目立ちます。でも、忠太の作品では丁寧な打ち抜き仕様で、このような金具を見つけたら忠太のかかわりを期待、という感じです。明治神宮¹⁴で忠太が手がけた部分と戦後再建した部分の見分け方にもなります」

倉方「デザインはアール・ヌーヴォー的。これは日本建築の伝統にありません」

志村「唐草文様のような植物柄で、アジアから西洋の薫りが漂います。また、正円が隠れていたり、上下や左右で線対称になっていたり、いかにも図面に描いたという感じで、基準線が見えるよう」

倉方「設計者が基準線をもとに図面を描いたものを施工者が形にした。まさに近代の建築家が始めた建築のづくり方が、このような金具からも見えてきます」

装飾金具は拜殿の高欄や登り階段、正面の板戸、周囲に巡らせた部戸、本殿側面の妻飾りなどにも多用されている。

志村「木鼻にまで装飾金具を取り付けるのは珍しい。愛らしいハート形も見えますが、これは似た形の『猪目』という伝統文様ではなく、唐草図案の重なりにたまたま現れたという幾何学性を感じます」
倉方「自分のやりたいことをやっても、あとで言い逃れできるように正当性を担保するのが忠太。震災記念堂¹⁵も内部構成は明らかにパシリカ式の教会ですが、見えがかりは飛鳥様式や禅宗様を取り入れ、これは純日本式と説明できるようにしている。帝大教授としての体面があるから、その点はうまく両立させていたのでしょう」

拜殿は、屋根のボリュームや縁の高さに比べて軒高があり、全体として縦長の印象を受ける。どこか西洋建築のプローションに通じるイメージを抱かせるのは、忠太ならではの感性と言えるかもしれない。また、志村教授は「木部にも忠太のオリジナリティが表れている」と指摘。「拜殿の4本の向拝柱に対する階隠しや斗 椽 などの組物がシンプル。縁の下も普通なら貫が入ります」という。

伝統的な神社建築に付き物の彫刻もほとんど見当たらない。「全体にピュアな造形で、図面に描いたらきれいでしょよし、コンクリートでこのままつくれるようなところがある。まさに近代の社殿という感じがします」と志村教授。

彫刻の要素がないため懸魚げんぎょが目立つが、よく見ると繊細な意匠で、これも珍しい。倉方准教授は

「木部の造作は彫り師など職人の技に頼ることでなります。でも忠太は設計ですべてコントロールしようとしている。これぞまさに建築家の手法です。この神社では『建築家とはどのような存在か』ということと『伊東忠太の個性』を同時に知ることができます」と語る。

忠太にとってのリターンマッチ

忠太は明治期の終わりに「建築進化論」を提唱。明治神宮の創建構想の議論ではその立場から、神社の様式も時代とともに変化してきたのだから、これから新しく建てる神社には新しい様式がなければならぬし、構造も木造に限らず、最新の材料や技術を用いるべきとの論を展開した。

しかし、明治神宮造営の裁可後、1914（大正3）年に神社奉祀調査会の委員となり、その社殿建築の一切を任せられると、忠太は先の進歩的な持論を封印し、神社木造論を唱えるようになる。この転向についてはいくつかの見解があるが、倉方准教授は「忠太の人間っぽいところだと思います。大勢が木造だから逆らわなかった」と話す。「忠太が新しい構造で神社をつくることを主張したのは、ひとえに新しい様式や意匠を実現しなかったから。彼はこの一件で、最も保守的な神社でそれは困難と悟り、その後、神社には積極的にかかわらなくなります」。

上杉神社の再建工事は、明治神宮が竣工した1920（大正9）年に始まった。「忠太にとってリターンマッチだった」と倉方准教授。「米沢で忠太は我が郷が生んだ博士ですから、人々の理解や協力は大きかったですよ。忠太はその好意的な空気を感じて、これは新しい神社建築に挑戦できるチャンスと思ったのではないのでしょうか。木造だから新しい試みも細部でしか実現できていないが、「細部だけでも全体の印象がこれだけ変わることを示しています。だから最初に見たときは感動しました。木造でもここまでやっていたのかと。神社なのに鑑賞の対象になっている点も近代建築らしい」。

忠太は竣工後、「殊に本殿廻りの一区はよく引きしまり落ち着きがあつて清純純潔の感が深い」と感想を述べたという。満足感がうかがえるひと言ではないか。

コンクリート造の耐火建築も

新しい建築をつくりたい。そんな忠太の思いは、同じく設計を手がけた稽照殿と祭器庫にも表れている。いずれも鉄筋コンクリート造なのだ。

鉄筋コンクリート造は1923（大正12）年の関東大震

災以後、全国的に普及するが、稽照殿と祭器庫はそれに先んじて完成している。「これらは国内でも早い時期につくられ、現存するコンクリート建築として貴重な存在です。大正から昭和初期にかけてコンクリートでつくられた宝物館には、東京の明治神宮宝物殿や鎌倉の鶴岡八幡宮境内の鎌倉国宝館などがありますが、ごく少数。ここも大火のあととはいえ、コンクリートの採用は画期的だったと想像できる。忠太は透塀の外なら聖域ではないと考えたのかもしれませんが」と志村教授は語る。

稽照殿は2階建てに見えるが実は平屋だ。建物の意匠は隣接する木造社殿との調和を図っている。2階に回廊を巡らせた重層のつくりに、当初は瓦葺きだったという切妻の大屋根をのせ、出入口部分に大きく張り出した車寄せには唐破風を採用。志村教授は「軒下の垂木や外壁の組物など、コンクリート造ながら和風デザインを見事に継承し、スケールにも無理がありません」と評価する。

一方、祭器庫の外観意匠は伝統的な木造建築の校倉造りを模している。志村教授は「こちらは実験的。少しやりすぎな感じがしますね」と言いつつ、その背景に理解を示す。「忠太は大火後の故郷に、当時最新の耐火材料であるコンクリートを普及させたいと考えた。しかし当時、市民はまだコンクリートを知りませんから、少なからぬ拒否反応があったと聞きます。校倉風は人々を納得させるための方便だったのかもしれませんが」。

デザインを仕事にする「大義」

竣工後に「これまで携わったどの工事よりも幸福だった」と忠太に言わしめた上杉神社。倉方准教授は「故郷への恩返し of の気持ちから、忠太が本気でこの仕事に臨んでいたことが随所に見て取れます。だから忠太らしい神社が出来上がった」と話す。

忠太が米沢で暮らしたのは幼少期のわずか数年。有為会を設立するなど米沢とのかかわりが切



上杉神社の狛犬

10 | 上杉神社祭器庫

1921年竣工。祭祀に使う器具や祭具を収めておく倉庫。本殿に対して左手奥に立つ

11 | 狛犬

獅子や犬に似た空想上の生物で、守護獣像として神社の入り口の両脇、または本殿の正面左右などに一対で置かれる

12 | 兼松講堂

東京・国立に1927年竣工。東京商科大学（現・一橋大学）が関東大震災後に国立と小平に移転した際、忠太の設計で建てられたロマネスク様式の建物。内外に多くの妖怪が絡みつく

13 | 築地本願寺

1934年竣工。忠太の実作では最大規模。外観意匠はインドやイスラムの建築様式の折衷、全体構成は西洋建築の性格が強い。内外に潜むさまざまな動物の彫刻も有名だ。本堂内部は檀家の反対にあったため、従来の本願寺式の和風を踏襲。設計の依頼主は浄土真宗本願寺派（西本願寺）22世門主の大谷光瑞。忠太はアジア・欧米留学中に偶然、大谷率いる探検隊の一員と出会い、大谷との関係が生まれた。京都の「真宗信徒生命保険会社（現・伝道院）」も大谷が設計を依頼した

14 | 明治神宮

1920年竣工。明治天皇と昭憲皇太后を祀る。創建当初の主要社殿は第二次世界大戦の空襲で焼失し、1958年に復興造営がなされた。南神門（樓門）と客殿（旧宿衛舎）、廻廊の南半分は戦災焼失を免れた。これらの設計は忠太の指揮のもと、安藤時蔵と大江新太郎が担当した

15 | 震災記念堂（現・東京都慰霊堂）

東京・両国に1930年竣工。関東大震災の犠牲者の追悼施設として建てられたが、東京大空襲などの犠牲者も追悼するために1951年に改称。正面は大きな唐破風をもつ和風、背面に接続する塔は中国風、内部の構成はバシリカ式。忠太の折衷的な手法がいかに発揮されている

16 | 佐野利器

建築家・構造学者（1880–1956）。山形県西置賜郡荒砥村（現・白鷹町）の旧家、山口家の4男として生まれる。幼名は安平。1893年藩校興譲館の流れを汲む米沢尋常中学校に進学。父が死去したため佐野家の養子となり、そのときに利器と改名。第二高等学校を経て東京帝国大学工科大学建築学科に進学。1917年同大学教授に就任。建築構造学の基礎を確立した

倉方俊輔 くらかた・しゅんすけ

1971年東京都生まれ。1994年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1996年同大学大学院修士課程修了。1999年同大学院博士課程満期退学。博士（工学）。西日本工業大学准教授を経て、2011年より大阪市立大学大学院工学研究科准教授。

志村直愛 しむら・なおよし

1962年神奈川県生まれ。1985年東京藝術大学美術学部建築科卒業。1988年同大学大学院修士課程修了。1993年同大学院博士課程満期退学。同大学建築科非常勤講師を経て、2006年より東北芸術工科大学デザイン工学部環境・建築デザイン学科教授。

長井美暁 ながい・みあき

編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学卒業後、『室内』編集部に所属。2006年よりフリーランス。

れることはなかったが、それでも「故郷」と思うものだろうか。倉方准教授は「世界は異文化で成り立っていることを実感した最初のきっかけは、米沢を離れたときだったはずです。その後、忠太は世界を一周して異文化への理解を深めました。その原点ともいえる米沢時代に対しても、新たに愛着を深めたのではないのでしょうか」と推測する。

志村教授は「両親が米沢に暮らしていたことも大きいでしょう」という。忠太の両親や祖父母、兄夫婦は龍泉寺の伊東家の墓所に眠る。墓碑は忠太のデザインで、母の墓碑の隣にはやはり忠太のデザインによる大日如来座像が寄り添い、その台座には忠太ら3兄弟の名が刻まれている。

忠太の兄は父のあとを継いで医者になり、弟は実業家になった。「男3人兄弟の真ん中はいたい変わり者」と、自身も男3人兄弟（の長男）という倉方准教授は笑う。城のあるまちは保守的で堅い土地柄と言われるのは米沢にもそのまま当てはまり、戦前に大成したのは軍人か医者が多い。国家社会に役立つという「大義」が男子一生の仕事を決めるうえで不可欠だった。忠太の父は長崎で西洋医学を修め、当時最も進歩的な教育を受けた人だったが、美術家になりたいという息子を諫めた背景には、そんな周囲の環境がある。忠太よりひと回り年下だが、米沢と同じ置賜地方に属する白鷹町出身の佐野利器¹⁶も、国家社会に尽くしたいと建築の中でも耐震構造の道に進んだ。

だから建築デザインという分野で身を立てた忠太は異色だ。相当なプレッシャーもあっただろう。しかし、その圧力が「忠太を強靱にした」と倉方准教授。「デザインを仕事にする『大義』が必要で、あれだけの理論を打ち出した。つくった建築も単に面白いのではなく、落語の『考え落ち』のようなものがあ

る。こうした深みも米沢の気風に後押しされたのではないかと思います」。

市民のための神社を目指して

上杉神社の竣工後、市民からの「米沢のまちに比べて神社が過ぎた出来だ」という声に、忠太は「神社の壮観を標準に、まちをつくってほしい」と応えたという。「忠太は自分のつくった建築を通して、大火で焼け野原になった郷里にエールを送った。建築家として最高の仕事ではないでしょうか」と志村教授。

上杉神社は再建復興や祭神が謙信公といった、それこそ「大義」がありながら、威圧感がない。境内は開門時間中にしか入れないが、外側の広場は24時間開放されている。境内は軸線を意識した配置や意匠だが、広場は稽照殿や祭器庫を含めて伸び伸びとして、その対比が広場をより自由に感じさせている。

忠太は建築が市民のものにならないと、その概念が広く浸透することはないと考えていた。そのためには理屈よりも心に響くことが大切だとも考えていた。倉方准教授は「上杉神社の広場の穏便な配置計画も妖怪も、着地のさせ方が違うだけで、彼の中では区別がないと思います」と語る。

市民に愛される建築。現代において盛んに叫ばれるこのフレーズを、建築の概念や建築家のあり方を確立することに努めた忠太は当時すでに意識していた、と言えはしないだろうか。

1954（昭和29）年、米沢市より忠太に名誉市民第1号の称号が贈られた。忠太が88年に及ぶ生涯を閉じたのは、そのひと月ほどあとのことだった。



稽照殿は宝物殿で、当時最新の鉄筋コンクリート造を採用。桁行54尺、梁間30尺、上層の窓は展示室内に外光を採り入れるためにある。この窓や欄間、出入口には竣工時から防火設備として自動巻き上げシャッターが設置されていたという



祭器庫も鉄筋コンクリート造ながら、高床式・校倉造りという日本の伝統的な木造建築のスタイルを模している。祭器庫と稽照殿は、本殿に対して左右対称に配置されている

MAP 1

16 17 18

上杉神社

1923年（社殿）、1922年（稽照殿）、1921年（祭器庫）

設計 | 伊東忠太

伝統を守りながら 新しさに挑んだ会心作

上杉神社のある松が岬公園は米沢城の本丸跡だ。江戸期は城内の御堂に仏式で祀られていた米沢藩の藩祖、上杉謙信を神式で祀るため、1876（明治9）年に社殿を建立したが、1919（大正8）年の米沢大火で焼失。翌年から始まった大規模な再建工事で忠太は顧問を務め、社殿や稽照殿、祭器庫の設計も手がけた。

稽照殿の車寄せや神門の唐破風は、忠太得意の横長で平たいデザイン。倉方准教授は「平安時代の唐破風に近い。唐破風のカーブは、平安時代は緩く、時代が下るにつれ、きつくなっていく。江戸時代にははりむくりのようになります。忠太は江戸の心を残したと言われるけれど、近代の建築家は江戸文化を否定しています。そうしないと自らの存在意義を見出せないからです」と話す。江戸文化をそのまま引き継いだ大工の手になる料亭や銭湯との違いを明確にするため、最も古いものを評価した。唐破風の場合、それが平安時代だった。つまり「忠太の唐破風は新古典主義、江戸時代の唐破風はバロックかロココのようなもの」という。

伊東忠太 略歴

1867（慶応3）年
山形県米沢市に、3人兄弟の次男として生まれる

1871（明治4）年
藩学興譲館に入学

1873（明治6）年
父が赴任していた東京へ移住

1892（明治25）年
帝国大学工科大学造家学科卒業。大学院に進学

1893（明治26）年
「法隆寺建築論」を発表。平安神宮の建築技師を委嘱し、京都に赴任

1894（明治27）年
論文「『アーキテクチュラル』の本義を論じて

其の譯字を撰定し我が造家學會の改名を望む」を発表し、造家学会（現・日本建築学会）の改名を主張

1895（明治28）年
平安神宮（京都）竣工

1898（明治31）年
大学院修了論文、学位請求論文として「法隆寺建築論」を提出。造神宮技師兼内務技師に任命される

1899（明治32）年
東京帝国大学工科大学助教授となる

1902（明治35）年
建築学研究のため文部省より3年間の中国・インド・トルコ留学を命じられ、ギリシャやエジプト、ヨーロッパ各国、アメリカなども訪問

1905（明治38）年
東京帝国大学工科大学教授となる

1920（大正9）年
明治神宮（東京）竣工

1923（大正12）年
上杉神社（山形）竣工

1924（大正13）年
沖縄に出張し、首里城正殿を調査、特別保護建造物に指定

1927（昭和2）年
東京商科大学（現・一橋大学）兼松講堂（東京）竣工

1928（昭和3）年
東京帝国大学を定年退職。早稲田大学教授に就任

1930（昭和5）年
震災記念堂（東京、現・東京都慰霊堂）竣工

1934（昭和9）年
築地本願寺（東京）竣工

1943（昭和18）年
文化勲章を受賞（建築界で初）

1954（昭和29）年
米沢市名誉市民第1号となる。東京の自宅で逝去、享年88（満86歳没）



1



2



3

- 1 神門は唐破風の付いた唐門で桁行6尺、梁間11尺。木曾産のひのきを用い、屋根は防火のために銅板葺き。扉に施された打ち抜き装飾金具に忠太の個性が見られる。透塀は杉
- 2 背が高く、縦長のプロポーションの本殿は流造り。桁行20尺、梁間13尺。破風の懸魚以外に彫刻はほとんどなく、全体にシックなデザイン
- 3 拝殿は入母屋造りで、桁行34尺6寸、梁間21尺5寸。向拝柱は2本のことが多いが、ここでは4本。本殿とともに構造材は木曾ひのきを使用、屋根は銅板葺き

上杉伯爵邸(上杉記念館)

1925年

設計 | 中條精一郎 設計助言 | 伊東忠太

西洋のエッセンスを取り入れた 近代和風住宅

最後の米沢藩主、上杉家14代茂憲伯爵の本宅として1896(明治29)年に建てられたが、1919(大正8)年、伯爵逝去の1カ月後に米沢大火で焼失。米沢出身の建築家・中條精一郎の設計により再建された。現在は上杉記念館と称し、郷土料理の提供を行っている。

中條は上杉家15代憲章伯爵に随行してイギリス留学したという関係がある。建物は入母屋造りだが、軒の出が小さく、そのせいもあって真壁が目立つ。どことなく洋館のプロポーションで、室内も和風住宅の平面構成だが天井が高い。清楚で品格のある設えで、倉方准教授が「近代和風とイギリス貴族の邸宅を混ぜ合わせたような感じ」という意匠がそこそこに見られる。たとえば大広間の付け書院の欄間には、上杉家の家紋「竹に雀」をモダンにアレンジした造作が施されている。その下の障子の組子にも注目。細い材の表側がすべて曲面に面取りされているのだ。階段室は漆喰壁と木の腰壁の境界に設けられた木部が柱に近づく直前に柔らかなカーブを描き、最後に柱と直交する。倉方准教授によるとこれも西洋の手摺りのつくり方だという。天井を見上げると、天井板が扇子を広げたように板が張っており、そこに竿をきれいに回している。また、外側の壁には高窓、中央の壁にも障子窓が設けられ、階段室の隅々に光が届くようにとの配慮も感じられる。倉方准教授は「インテリアとして室内をきちんとつくろうという感覚は西洋的。そういう狙いなら天井が高くなるのも道理だし、室内から考えていった結果としての外観のプロポーションなのでしょう」と話す。



1 大広間の縁側から客間棟を見る。外側の木材の風化が荒々しい。米沢は豪雪地帯で、冬、多いときは2m近い積雪になる。厳しい自然にさらされて木材の肉厚が減り、流木のように痩せているところが見られた

2 客間棟の折り返し階段の階段室。天井板の張り方などが凝っていて、インテリアとして作り込んだ気概を感じる。「階段室が見せ場になっているのは洋館と同じですね」と倉方准教授

3 大広間。天井を高くしたぶん欄間も高い

4 大広間の付け書院の欄間。上杉家の家紋「竹に雀」をアレンジした手の込んだ造作が目玉

5 庭園から見た南側外観。右から大広間・玄関棟、客間棟、仏間棟で、仏間棟は方形造り。屋根はいずれも上杉神社の社殿と同じ銅板葺き。登録有形文化財。庭園は東京の浜離宮に倣ってつくられた



2



3



4



5

米沢が生んだもう一人の建築家、 山下寿郎とその事務所

取材・文 | 磯 達雄
写真 | 小松正樹(特記以外)



山下寿郎

やました・としろう

建築家(1888-1983)。米沢市生まれ。東京帝国大学工科大学建築学科卒業後、三菱合資会社、芝浦製作所、三井合名会社を経て、山下寿郎建築事務所を設立。1920-1948年、東京帝国大学で講師を務めたほか、日本建築士会連合会理事、日本建築設計監理協会会長なども歴任した。
[写真提供：山下設計]

伊東忠太、中條精一郎のほかにもう一人、米沢からは近代建築史に重要な役割を果たした建築家が生まれている。日本を代表する組織設計事務所のひとつ、山下設計を創業した山下寿郎だ。彼が育てた設計事務所が、戦後の米沢で多くの主要建物を設計し、まちの発展に貢献した。これらの建物に投影されている創業者の精神について探ってみよう。

昨年、米沢市の中心部にオープンした「ナセBA」は、市立図書館と市民ギャラリーの機能を併せた公共施設だ。一番の見どころは、天井が高い開架書庫のスペースで、大きな壁面は閉架書庫の本で埋められ、図書館ならではの魅力的な大空間が実現している。

設計したのは山下設計だ。実は米沢市内には山下設計が手がけた建物がほかにもたくさんあり、調べてみると、その理由はすぐに推測できた。そう、創業者の出身地なのである。伊東忠太、中條精一郎に続いて、日本の近代建築史を飾る偉大な建築家ももう一人、ここ米沢から生まれたのである。

山下設計を創業した山下寿郎は、1888(明治21)年、米沢に生まれる。祖父、山下新右衛門は米沢の上杉家に仕えた藩士で、その長男の新力が寿郎の父親にあたる。彦根高等女学校の校長も務めた教師であった。

寿郎の人格形成に大きな影響を与えたであろう身近な人物が、叔父にあたる源太郎だ。山下源太郎は海軍の軍人で、連合艦隊司令官まで務めた名将として知られており、幼い寿郎にとっては憧れの対象だったに違いない。寿郎自身も海軍に進もうと望んだが、小柄だったために兵学校に入れなかったのだという。

もう一人、山下寿郎にとって重要な同郷の人物がいる。ほかでもない、伊東忠太だ。忠太は、寿郎の母であるふみと、いとこの関係にあたる。高等学校、大学を通じて寿郎の同級生だった竹腰健造(長谷部竹腰建築事務所の創業者)の回想によれば、「山下君は建築科を選ぶことに少しの迷いもなかった。それは(中略)深く伊東先生の人格に傾倒していたからであろう」という。そして、山下は伊東忠太が教授を務める東京帝国大学工科大学の建築学科へと進むのであった。

エンジニア・アーキテクトが 起こした組織事務所

大学を卒業した山下寿郎は、忠太の勧めもあり三菱に入社し、桜井小太郎の下で「丸ノ内ビルヂング」(1923)の設計に参加。その後、三井、芝浦製作所などでの嘱託を経て、1928(昭和3)年に自らの事務所、山下寿郎建築事務所を立ち上げる。そして戦後、株式会社山下寿郎設計事務所に改組改称(1974年、さらに株式会社山下設計に改称)し、組織設計事務所として発展させた。

石本建築事務所、久米設計、佐藤総合計画など、日本に創業者の名前を冠した組織設計事務所はほかにもあるが、それらの創業者の多くがデザイン・アーキテクトであるのに対して、山下寿郎は、もともと構造を専攻したエンジニア・アーキテクトだった点に大きな特徴がある。事務所でも設計において山下寿郎本人が図面を引くことはほとんどなく、優秀な所員に力を発揮させていたとされる。

元副社長の村田麟太郎氏も、「強烈な個性やカリスマ性で信者を引きつけ、それを基点に事業を発展させていくという構図は山下設計には見られない。むしろ、山下先生の人柄をしたって若い俊秀が集い、その手の中で抑制のきいた好感もてる建築や施設をつくってきたという方が近い」と記している*。

市の新たな センターゾーンを設計

山下設計が米沢市で本格的に建築設計を始めるのは1960年代後半からのことだ。当時の市長だった吉池慶太郎が、市内の金池地区で大規模な土地区画整理事業を行い、そこに市庁舎をはじめとし



ナセBA(市立米沢図書館・よねざわ市民ギャラリー)(2016)

開架書庫は壁柱で支えられた巨大な吹き抜け空間になっている。上部3層の書庫は来館者がアクセスできない閉架の扱い。居室ではないため、吹き抜け部の壁面区画が不要となった
[写真：石田 篤]



1

1 米沢市庁舎(1970)
行政情報の効率化をテーマとして設計され、文書の集中管理室や搬送用のエアシューターを設けた。建築を情報空間としてとらえる先進的な取り組みだが、一方で議場棟の屋根は民家の屋根を連想させるもので、風土を意識したデザインにもなっている



2

2 米沢市営体育館(1971)
市役所と向かい合って建ち、同じく山下設計の設計による武道館(1971)も併設されている



3

3 置賜総合文化センター(1973)
体育館に隣接する市の社会教育施設。中央公民館、青年の家、視聴覚センターの機能をもつ。竣工当初は図書館もこの施設内にあった

米沢建築めぐり

YONEZAWA

米沢は戦国時代には伊達氏の、江戸時代には上杉氏の本領となった城下町であるが、古くから織物の盛んな土地であった。青守を使った麻織物に始まり、江戸時代には徐々に養蚕と絹織物に移行。明治期には海外輸出も始まり、近代日本の原動力である織物産業が栄えた。当時は日本最北の織物産地。米沢近代のまちや建築は、そのような経済力に支えられ生まれたものだ。

歴史建造物は上杉氏ゆかりの建築が多いが、一方で、明治から大正にかけてつくられた質の高い木造洋風建築もいくつか残っている。初代山形県令・三島通庸が近代化を目指し県内に洋風建築を建てさせた影響もあるが、それらは近代をリードしたまちの証と言えるだろう。なかでも「旧米沢高等工業学校本館」は圧巻。この学校の一教授が起こしたベンチャー企業がこの繊維メーカー・帯人に成長していく。

また、米沢地方は多くの建築家を輩出している。伊東忠太をはじめ、中條精一郎、佐野利器、山下寿郎など、近現代建築の礎をつくった人材の出身地であり、ゆかりの建築もまたみどころだ。



写真 | 小松正樹

た公共施設を移転して集約させる。これらの施設のうち、市庁舎（1970）、消防署（1970）、米沢市営体育館・武道館（1971）、置賜総合文化センター（1973）といった主要設計を山下設計が担当した。市民が集う都市の新たなセンターゾーンの形成が、ひとつの設計事務所に任せられたのであり、規模を比較すれば小さいが、ル・コルビュジエが設計したチャンドーガルやオスカー・ニーマイヤーが設計したブラジリアに近いとも言える。

これら一連の施設の設計時、山下寿郎は80歳になっていた。生まれ故郷とあって積極的に関与したかもしれないと想像したが、市庁舎の設計を担当した元山下設計の伊東敏雄氏に尋ねると、特に口を出すこともなく、じっと見守ってくれていたという。その態度からは、米沢藩の藩主であり、財政難にあえていた米沢藩を立て直して名君の誉れ高い上杉鷹山が連想されると伊東氏は言う。

「鷹山は滅私の精神で藩に尽くした。建築家としての山下寿郎先生も、自己の表現に興味がなく、ク

ライアントや社会のために何をすべきかをもっぱら考えていた」。

「してみせて、言ってきかせて、させてみる」

思い出すのは鷹山の名言だ。「なせば成る、なさねば成らぬ、何事も」が有名だが、それとともに知られているのが「してみせて、言ってきかせて、させてみる」という言葉だ。指導者がまず自ら率先して動くことの大事さとともに、相手に任せてみる必要性を説いているとも受け取れる。この鷹山の人材育成術が、米沢生まれの山下寿郎に受け継がれ、その事務所で働く建築家たちを育て、日本を代表する設計組織をつくりあげたのかもしれない。そんなことも考えてみたくなる。

米沢にはほかにも文化会館、ミュージアム、学校など、山下設計が手がけた建物が数多くあり、それらを辿りながら行くまち歩きも楽しい。

取材協力：伊東敏雄（建築都市設計研究所 所長）、村田麟太郎、株式会社山下設計 広報室

磯 達雄 いそ・たつお
建築ジャーナリスト／1963年埼玉県生まれ。1988年、名古屋大学工学部建築学科卒業。1988-1999年、日経アーキテクチュア編集部勤務。2002年よりフリックスタジオ共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。



米沢市市民文化会館（1969）



米沢信用金庫本店（1972）



米沢市消防庁舎（1970）



宮坂考古館（1991）

市内には山下設計が手がけた建物が点在する。公共施設ばかりでなく、金融機関店舗や医師会館など、民間の建物も多く手がけた。上杉家に仕えた戦国武将、前田慶次の甲冑を展示した展示施設（宮坂考古館）や、伝統を誇る造り酒屋の工場など、米沢の重要な観光資源となっている建物もある



上杉氏が築いた城下町

2度の大火を乗り越えて

米沢は山形県南部の中心都市だ。その歴史を遡ると、大きな転機となったのは17世紀の初め。戦国武将として名高い上杉謙信の跡を継いだ上杉景勝が、関ヶ原の戦いで破れた西軍についたため、1601（慶長6）年、滅封されて米沢へと移る。以後272年間、米沢は上杉氏の城下町として発展した。なかでも中興の祖とされる9代藩主の上杉鷹山は、質素倹約に努めて苦しい財政を立て直すばかりでなく、現在、米沢の名産とされる品々の生産を奨励し、産業を興した。米沢織もそのひとつで、時代が明治に変わっても、街は絹織物の産地として栄える。その跡は、数多く残る蔵に見ることができる。

市街は米沢城址を中心として広がるが、その形成に大きな影響を与えたのが、1917（大正6）年、1919（大正8）年と続けざまに起こった大火だ。中心市街地の大部分がその被害を受け、市庁舎、警察署、郵便局、学校、銀行など、主要施設の多くが焼失した。この特集で採り上げた上杉神社や上杉伯爵邸も、この大火で失われた建物を再建したものである。

戦後は、1956（昭和31）年から5期、20年にわたって市長を務めた吉池慶太郎が、工業団地の造成や企業の誘致、道路やトンネルの建設など、市のインフラ整備や構造転換を積極的に推進。市庁舎も北側の金池地区に移転させ、その周りに公共施設を集めて新たなセンターゾーンを生み出している。

01

大聖寺（亀岡文殊堂）
設計 | 伊東忠太
竣工 | 1914年
東置賜郡高島町亀岡4028-1
日本三大文殊のひとつとされる。深い杉林の間に続いている長い参道を上りきった先にある。建立は807（大同2）年に遡るが、現在の建物は大正期の初めに再建されたもので、その設計に伊東忠太がかかわったとされる。「虹梁や木鼻に見られる唐草文様と裏腹の透し彫りなどにパルメットに通じる西洋のデザインソースを感じさせる」と志村直愛氏は指摘する



02

ufu uhu garden
設計 | 伊東空間研究所
竣工 | 2012年
米沢市赤芝町1627-1
直営農場で採れた新鮮なたまご、それを原料としてつくったスイーツを販売。カフェとしても営業している。複雑な形状の屋根は、周りを囲む山の風景と響き合い調和している。第15回米沢市景観賞（現代部門）受賞



04

旧米沢高等工業学校本館
設計 | 中島景次郎（文部省建築課） 竣工 | 1910年
米沢市城南4-3-16
1910（明治43）年に、全国で7番目の高等工業学校として開設された。ルネサンス様式を基調とした木造2階建てで、変化をつけた屋根と、正面玄関の両脇に建つ階段室を内包した塔が目玉を引く。外壁は薄緑色をした下見板張り。内部は漆喰塗りで、細部まで意匠が施されている。JRM米沢駅の駅舎のデザインモチーフにもなった。重要文化財



03

ufu uhu FARM
設計 | 小野光匠
竣工 | 2016年
米沢市赤芝町字馬場河原1617



「ufu uhu garden」と同じ鶏卵会社が運営する施設で、木造の建物では雑貨販売と軽食の提供を行う。奥に広がる庭園も見どころで、たまご形にカーブした遊歩道を歩いて行くと、巨大なニワトリのオブジェ、花畑、池などが次々と現れるダイナミックなランドスケープを楽しめる。建物脇の展望台に上ると、庭の全景を見渡すこともできる。第18回米沢市景観賞（現代部門）受賞



05

**山形大学工学部
百周年記念会館**
設計 | 高宮真介／計画・設計工房
竣工 | 2010年
米沢市城南4-3-16
セミナールーム、カフェ等を取めた施設。庇を長く延ばして、積雪時でもその下を活用できるようにしている



06

**半円の集合住宅
（レジデンスTOMO城南13）**
設計 | 押尾章治＋UA
竣工 | 2015年
米沢市城南4-1-25
学生向けの低層の集合住宅。半円形平面の棟が向かい合いながら連続し、その間に路地状の通路空間が設けられている。第17回米沢市景観賞（現代部門）受賞



07

**格子の集合住宅
（レジデンスTOMO本町18）**
設計 | 押尾章治＋UA
竣工 | 2016年
米沢市本町1-3-28
学生向けの低層の集合住宅。敷地に沿って建つ2棟が共用玄関でT型につながり、壁面全体を覆う木製の堅格格子が、建物の内外をゆるやかに仕切る。第18回米沢市景観賞（現代部門）受賞



12

九里学園高等学校本校舎（旧・米沢女子高等学校校舎）
建設顧問 | 玉上義男 設計 | 江部春雄・高橋昌義
竣工 | 1936年
米沢市門東町1-1-72
九里裁縫女学校（1947年に米沢女子高等学校と改称）の校舎として、昭和初期に建てられた。外観は下見板張りのハーフトンパーで、ペンキで仕上げられている。特徴はL字形平面の角部に、十字路へ向いたファサードを設けたこと。ヨーロッパの古典建築を連想させる丸柱やペディメント風のデザインが、建物を彩っている。登録有形文化財



08 09

**小嶋総本店
小嶋総本店塩詰工場**
設計 | 不詳（総本店）、山下設計（塩詰工場）
移築 | 大正期（総本店）
竣工 | 1979年（塩詰工場）
米沢市本町2-2-3
慶長2年創業の米沢藩上杉家御用酒屋として知られる造り酒屋の建物。大正時代の大火で蔵以外の建物を焼失したが、郡山の商家を移築し、かつてのまちなみを再現している。店舗は、第9回米沢市景観賞（残したい建物部門）受賞



10

吉亭
設計 | 不詳
竣工 | 1919年
米沢市門東町1-3-46
もとは米沢織の織元だった建物を米沢牛と山懐料理の店とした。土蔵のナマコ壁が街道の景観を形づくっている。建物は国の登録有形文化財。屋敷を囲む黒塀は、第14回米沢市景観賞（現代部門）を受賞



11

酒造資料館 東光の酒蔵
設計 | 不詳
竣工 | 1984年（復元）
米沢市大町2-3-13
酒造りのプロセスや酒にまつわる文化を展示した施設で、試飲コーナーや売店もある。古い酒蔵を原形を保ちながら復元し、1棟140坪の大きな土蔵には昔ながらの造り酒屋の様子と酒造りの道具などを展示している。第14回米沢市景観賞（残したい建物部門）受賞



13

伝国の杜（米沢市上杉博物館、置賜文化ホール）
設計 | 関・空間設計
竣工 | 2001年
米沢市丸の内1-2-1
市の博物館と県の文化ホールを合築した施設。広場に向けて大きな庇を張り出させ、歴史文化ゾーンの豊かな外部環境を建物内部に引き込んでいる



14

上杉伯爵邸（上杉記念館）
設計 | 中條精一郎
設計助言 | 伊東忠太
竣工 | 1925年
米沢市丸の内1-3-60



15

舞鶴橋
設計 | 不詳
竣工 | 1886年
米沢市丸の内1-4-13
もともとは米沢城の濠を渡るために架けられた橋で、現在は、上杉神社の参道となっている。石造のアーチ橋で、地元では「めがね橋」とも呼ばれる。登録有形文化財（撮影：石田 篤）



16

上杉神社祭器庫
設計 | 伊東忠太
竣工 | 1921年
米沢市丸の内1-4-13

17

上杉神社社殿
設計 | 伊東忠太
竣工 | 1923年
米沢市丸の内1-4-13

18

上杉神社禊祓殿（宝物殿）
設計 | 伊東忠太
竣工 | 1922年
米沢市丸の内1-4-13

19

**米沢市勤労福祉センター
アクティビー米沢**
設計 | 山下寿郎設計事務所
竣工 | 1971年
米沢市西大通1-5-5



20

米沢市医師会館
設計 | 山下寿郎設計事務所
竣工 | 1968年
米沢市門東町3-3-17



21

ナゼBA（市立米沢図書館・よねざわ市民ギャラリー）
設計 | 山下設計
竣工 | 2016年
米沢市中央1-10-6

米沢市市民文化会館
設計 | 山下寿郎設計事務所
竣工 | 1969年
米沢市中央1-10-2

23

米沢信用金庫本店
設計 | 山下寿郎設計事務所
竣工 | 1972年
米沢市大町5-4-27

24

龍泉寺／伊東家墓
設計 | 伊東忠太
竣工 | 1917年以降（本堂）、1911年（墓）
米沢市大町4-1-46

25

宮坂考古館
設計 | 山下設計
竣工 | 1991年
米沢市東1-2-24

26

山形銀行米沢駅前支店
設計 | 山下設計
竣工 | 1978年
米沢市東3-1-46



27

ホテルおとわ
博物館 | 不詳
竣工 | 1898年
米沢市駅前2-1-40
木造3階建ての本館は、千鳥破風、火灯窓、円柱などが豪壮にファサードを飾る。内部の客室もそれぞれに手の込んだ意匠で宿泊客の目を楽しませる。登録有形文化財



28

置賜総合文化センター
設計 | 山下寿郎設計事務所
竣工 | 1973年
米沢市金池3-1-14

29

米沢市営体育館・武道館
設計 | 山下寿郎設計事務所
竣工 | 1971年
米沢市金池3-1-62

30

米沢市庁舎
設計 | 山下寿郎設計事務所
竣工 | 1970年
米沢市金池5-2-25

31

米沢市消防庁舎
（置賜広域行政事務組合消防本部）
設計 | 山下寿郎設計事務所
竣工 | 1970年
米沢市金池5-2-41

参考

- 倉方俊輔「生き続ける建築2：挑戦の建築家 伊東忠太」、『INAX REPORT』No.168
- 社団法人米沢工業会「重要文化財 旧米沢高等工業学校本館」
- 志村直愛「米沢出身の建築巨人 伊東忠太の世界」山形新聞、2004-2005
- 松野良寅（編）「伊東忠太先生」我妻榮記念館、1992
- 松野良寅「我妻榮記念館双書 第二巻：海軍王国の誕生」我妻榮記念館、1997
- 宮本雅明「日本の大学キャンパス成立史」九州大学出版会、1989
- 米沢市 米沢市景観賞（<http://www.city.yonezawa.yamagata.jp/5466.htm>）2017.8.25アクセス
- 米沢市 文化財一覧（<http://www.city.yonezawa.yamagata.jp/2588.htm>）2017.8.25アクセス
- 米沢市 城下町ふらり歴史探訪（<http://www.city.yonezawa.yamagata.jp/1113.htm>）2017.8.25アクセス
- 文化遺産オンライン（文化庁および国立情報学研究所企画・運営）（<http://bunka.nii.ac.jp/index.php>）2017.8.25アクセス
- 文化庁 国指定文化財等データベース（http://kunishitei.bunka.go.jp/bssys/index_pc.html）2017.8.25アクセス